

2013年度後期「福祉経済論」の実例報告：
大人数授業におけるグループディスカッションと発表

和田 康 紀

三重大学共通教育センター
大学教育研究－三重大学授業研究交流誌－
第 22 号 別 冊
2 0 1 4 年 発 行

2013 年度後期「福祉経済論」の実例報告： 大人数授業におけるグループディスカッションと発表

和田 康紀

1. はじめに

本稿は、筆者が三重大学人文学部において 2013 年後期に開講した「福祉経済論」の中で新たに組み込んだ、大人数授業におけるグループディスカッションと発表の試みについて、実践事例を報告するものである。「福祉経済論」は、2 年次以降履修可能な人文学部法律経済学科の専門科目である。月曜日の 1 コマ目と水曜日の 2 コマ目に合計 30 回の授業を行っており、履修者数は、2012 年後期が 102 名、2013 年後期が 82 名であった。

報告に入る前に、こうした試みが求められている背景について述べたい。中央教育審議会大学分科会大学教育部会の報告(2012 年 4 月)¹⁾では、社会が急激に変化し、将来予測が困難になっている今の時代において、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな問題であるとされている。また、日本経済団体連合会が会員企業等を対象に実施したアンケート結果(2011 年 1 月)²⁾では、大学生の採用にあたって重視する素質・態度、知識・能力を問う質問に対して、主体性、コミュニケーション能力、実行力、チームワーク・協調性といった回答が特に重視されるとともに、大学が取組みを強化すべきものを問う質問に対して、教育方法の改善(双方向型、学生参加型、体験型授業の実施)、大学教員の教育力向上に向けた取組みの強化といった回答が多く挙げられている。

こうした社会の要請が高まる中、少人数の専門演習にとどまらず、大人数授業でいかに双方向型、学生参加型の授業実践を行っていけば、学生が自分の頭で問題を考え、その考えを的確に表現する力につながるか。筆者はこのような問題意識に立ち、2012 年度までの一方的な講義を見直し、2013 年度からは、90 分の中で、講義、グループディスカッション、学

生の発表を組み合わせた授業を行うこととした。以下では、2013 年度後期「福祉経済論」の授業方法と、学生の反応から見た授業効果について、述べていく。

2. 授業方法

(1) 授業概要の提示

第 1 回の授業で、次のように授業概要を提示した。

「社会保障制度について教員が解説を行うとともに、設定されたテーマに対する受講生自身の考えを毎回コミュニケーションペーパーに書いてもらい、グループディスカッション又は受講生からの発表を取り入れながら考察を深める。

※教員が一方的に話すだけの授業にはしない。演習的な要素を取り入れた受講生参加(双方向)型の授業を試みるので、受講生は受け身ではなく、授業に積極的に参加すること。」

(2) 一回の授業の進め方

① 講義

毎回レジュメを用意し、授業の前半 45 分程度で講義を行った。30 回の講義のうち、第 7 回までは、社会保障制度全体について経済財政的視点に立った解説を行い、第 8 回以降は、年金、医療、介護などの制度ごとに、制度概要や政策課題について解説を行った。レジュメには、学生の理解につながる資料と新聞記事を添付したが、時間の制約があることから、2012 年度に比べて、一回ごとのテーマを重点化し、解説の分量、内容を精選した。講義はできるだけ一話完結の形になるよう準備し、予定どおりの時間に収まるよう時間配分に留意した。

② コミュニケーションペーパー「1」の質問への記述

講義の後、学生には、当日配布したコミュニケーションペーパーの「1」の質問に対して、12~13 分で自分の考えを書かせた。質問については、講義の内容に関連しており、学生が自分なりの考えを書け

て、かつ、様々な回答が出てくると考えられるものを毎回設定した。回答が難しそうなものについては、添付した新聞記事を読んで参考にするように促した。コミュニケーションペーパーを用いた作業は、自分の頭で問題を考え、それを自分の言葉で記述する訓練となるように設けたものであるが、グループディスカッションでの自分の発言を整理してもらうという意味合いもあった。

なお、この授業の30回分の進行と、コミュニケーションペーパーを通じて学生に提示したすべての質問は以下のとおりである。

第1回：イントロダクション

「社会保障と税の一体改革」に関する社説（朝日新聞 2011年12月28日）を読んで、あなたのコメント（感じたこと、考えたことなど）を記載してください。

第2回：社会保障を取り巻く社会状況

少子高齢化と人口減少社会の到来は、日本の経済や社会に大きなインパクトを与えますが、これに適切に対応していく上で、あなたはどのようなことがカギになると考えますか。

第3回：社会保障の概念、範囲、機能

「所得格差を是正するため、高所得者に対しては、課税強化（増税）や社会保険料の負担強化、年金の減額などを行い、所得再分配を一層進めるべき」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第4回：社会保障の必要性

「年金保険料を未納している（納めてこなかった）人が高齢者になり、無年金になって生活に困窮した場合、生活保護を無条件に認めるべきではない（あるいは生活保護費を減額すべき）」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第5回：社会保障の歴史

国連人口基金の事務局長は、高齢化が世界全体で急速に進んでいる中、「日本の（社会保障の）取り組みは、途上国の多くにとって非常に参考になる。ぜひ広く世界に伝えてほしいと願っている」

とコメントしています（本日の記事参照）。諸外国から見て、日本の社会保障（これまでの歴史、施策、課題など）の中でどのようなことが参考になると考えますか。外国の人に日本の社会保障について紹介するつもりで考えてみてください。

第6回：社会保障の財源と費用

あなたは、日本が今後向かうべきなのは、国民負担が増えても社会保障の機能の維持・充実を進める方向か、それとも国民負担を減らして社会保障の機能を縮小する方向か、どちらの方向だと思いますか。その理由はなぜですか。

第7回：社会保険と社会扶助、社会保険と民間保険

「少子化が進む中、広く社会全体で子育てを支援するため（介護保険に類似した仕組みとして）保険料と公費負担を財源とする公的“育児保険”を導入すべき」との意見（添付資料参照）について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第8回：年金制度①

「国民年金（基礎年金）については、社会保険方式をやめて（保険料の徴収をやめて）100%税金で賄う税方式に変えるべき」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第9回：年金制度②

国民年金は民間の個人年金と比べて、有利（得）な仕組みになっています。どのような点が有利か（あるいはなぜ有利と言えるのか）について、あなたはどのように理解しましたか。

第10回：年金制度③

あなたは、今日の講義を聞いて、2004年の年金制度改正、特にマクロ経済スライドの意義（あるいは問題点）をどのように理解・評価しましたか。

第11回：年金制度④

「マクロ経済スライドの名目下限を撤廃して、物価や賃金が下がった場合でもマクロ経済スライドを発動すべき」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第12回：年金制度⑤

「在職老齢年金について、60 代前半の年金の減額基準を緩和すべき（例えば、60 代後半の制度と同じく、賃金と厚生年金との合計額が 46 万円を上回るまで年金を減額しない制度とすべき）」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第 13 回：年金制度⑥、医療制度①

三重県では、地方における勤務医の不足が深刻な問題となっています。あなたは、医師確保のためにどのような対策が最も有効だと考えますか。

第 14 回：医療制度②

私たち（患者）が質の高い医療を地域で選択して受けられるようにするためには、どのようなこと（方策、心がまえなど）が最も必要だと考えますか。

第 15 回：医療制度③

高齢者（70～74 歳、75 歳以上）は、現在原則 1 割の自己負担で医療を受けることができます。これについて、以下の三つの意見がありますが、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

- ① 高齢者の自己負担を現在のまま維持した方がよい
- ② 高齢者の自己負担を増やした方がよい
- ③ 高齢者の自己負担を減らした方がよい

第 16 回：医療制度④

増大する医療費を抑制する対策として、今日の講義で述べた対策のほかに、

- ① 公的医療保険の範囲を見直し、高度な医療については保険診療ではなく自由診療（公的医療保険制度の枠外）とすべき
- ② 軽症患者については自己負担とすべき

との意見があります。これらの意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第 17 回：医療制度⑤

あなたは、高齢者の医療費が増大する中、どのようにして高齢者の医療費を抑制（効率化）し、どのようにして高齢者の医療に必要な財源を確保していくべきだと考えますか。医療費の抑制、財源の確保のいずれか（あるいは両方）について、

取るべき方策を考えてみてください。

第 18 回：介護保険制度①

「家族介護者に対し、介護保険制度で現金を給付すべき」との意見について、あなたはどのように考えますか。その理由はなぜですか。

第 19 回：介護保険制度②

2025 年度の介護費用は、現在の 2 倍以上になると推計されています。あなたは、介護保険制度を今後とも持続可能な仕組みにするためには、どのようなことが必要だと考えますか。

第 20 回：介護保険制度③

あなたは、「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」を実現するためには、どのようなことが必要だと考えますか。

第 21 回：雇用保険制度

デンマークのような仕組み（資料 8 ページ）³⁾を日本でも導入していくことについて、あなたはどのように考えますか。正社員の解雇をしやすくすること、国民負担が増えることも念頭に考えてみてください。

第 22 回：第二のセーフティネット、労災保険制度

「第二のセーフティネット」については様々な課題、問題点が指摘されています。あなたは、どのような課題、問題点があり、どのような改善策が必要だと考えますか。

第 23 回：障害者福祉・雇用制度①

あなたは、障害者を地域で支援するために、どのようなこと（取組み、心がまえなど）が必要だと考えますか。

第 24 回：障害者福祉・雇用制度②

障害者の就労についての企業、社会の理解はまだ十分ではなく、必ずしも就労が進んでいないのが現状です。このような状況を変えていくためには、あなたはどのようなことが必要だと考えますか。

第 25 回：子ども・子育て支援制度①

結婚し、子どもをもちたいと思う人が多いにもかかわらず、結婚しなかったり、子どもをもたない

(もてない)人が多いという現実があります。その理由をあなたはどのように考えますか。

第26回：子ども・子育て支援制度②

保育所の待機児童は全国で2万2千人を超えています。待機児童の解消に向けて、あなたはどのような取組みが必要だと考えますか。

第27回：子ども・子育て支援制度③

民主党政権下で導入された子ども手当について、あなたはどのように評価しますか。その理由はなぜですか。

第28回：子ども・子育て支援制度④

母子家庭(父子家庭)については、収入の確保や、子育てと就労の両立に苦勞している母(父)が多い現状があります。このような現状に対して、あなたはどのような取組みを行うべきだと考えますか。

第29回：生活保護制度①

生活保護制度は、国民の最後のセーフティネットとして、しっかり機能しなければならない制度ですが、一方で、その財政負担も増加してきています。このような現状で、あなたは、どのような方策・取組みが必要だと考えますか。

第30回：生活保護制度②、まとめ

誰もが地域で安心して暮らせる社会を実現するために、あなたは、どのようなことが必要だと考えますか。30回分の授業の総仕上げとして、自分の考えを書いてみてください。

③グループディスカッション

コミュニケーションペーパーの記述後、4~5人のグループに分かれて、12~13分でグループディスカッションをさせた。第4回までは、前後左右の席でグループになるように指示していたが、履修者が固まる第5回以降は、グループごとに予め4~5人のメンバーを指定し、グループ1からグループ18までの決まった席に座らせた。グループは4回おきに組合せを変えた。これは、できるだけ多くの学生と顔を合わせ、様々な考えに触れることができるようになるためである。

実際には、当日欠席する学生もいるため、一つの

グループに出席者が1~2人ということも出てきた。このような場合には、その日に限って、ほかのグループに入ってもらいように指導した。

グループディスカッションの実施に当たり、学生には、グループ内で簡単な自己紹介をしてから、与えられた質問についてコメントを発表しあい、ディスカッションを行うことを指導した。また、ディスカッションの3つの約束として、「何を言っても許される場とする(遠慮なく自分の考えを述べよう)」、「みんなが発言できる場にする(周りに目を向けよう)」、「多様な考え方を尊重する(自分と異なった視点は貴重なもの)」を示し、積極的な議論を促した。

グループディスカッションの間は、教室内を巡回し、どのような議論が行われているかを確認して回った。残り3~4分頃を見計らい、3つのグループに対し、「この後発表をしてもらうから、用意しておいて」と声をかけた。これは、発表に向けた心づもりをしてもらうとともに、残り時間でグループでの議論を整理してもらうためである。

④全体発表

発表してもらうグループ名を紹介した上で、3つのグループの代表者(グループディスカッションの間に決めてもらう)に、グループディスカッションによって出された意見を発表してもらった(3グループ合計で10分程度)。これは、グループの中であえて一つに結論をまとめて発表するのではなく、グループで出された様々な議論をそのまま紹介してもらうことに主眼がある。なお、多くの学生が発表の機会を得られるよう、30回の授業の後半には「今まで発表したことのない人は積極的に発表してみましょう」と促すようにした。こうしたこともあり、30回の授業で、58名の学生が1回以上の発表を行った。

3名の学生の発表後、授業のまとめを行ったが、結論を押しつけるのではなく、多様な考えに配慮しつつ、発表にはない視点を提示することにより、学生の成長につながるよう心がけた。

以下、具体的な例を挙げる。第5回「社会保障の歴史」では、諸外国から見て、日本の社会保障(こ

れまでの歴史、施策、課題など)の中でどのようなことが参考になると考えるかについて、質問を提示した上で、コミュニケーションペーパーへの記述、グループディスカッションの後、全体発表をさせた。講義の中で社会保障の歴史について説明したことを踏まえ、発表者からは、その時々々の社会情勢に合わせて社会保障制度の見直しが図られたこと、国民皆保険によって誰もが安心して医療を受けられること、医療・介護ニーズの増大に伴い財源の確保が課題となっていることなどが挙げられた。授業のまとめでは、これらの点が学生から挙げたことを評価しつつ、伝染病予防など公衆衛生の整備に早くから取り組んだことや、介護保険制度の実施、高齢者の雇用促進など、ほかに特徴的な取り組みがあることにも触れ、学生の視野を広げるように心がけた。

⑤コミュニケーションペーパー「2」の質問への記述

最後に、コミュニケーションペーパーの「2 今日授業を受けて、あなたが気づき、考えたことは、どのようなことでしたか。また、私へのメッセージ(質問、意見、要望など何でも)を自由に記載してください」の質問に対してコメントを書かせて、コミュニケーションペーパーを提出させた。

(3) 授業の工夫

①Moodle の活用

講義の時間を前半 45 分程度に絞ったため、最低限理解してもらわなければならないことが考えられた。その対策として、前の週にレジュメとコミュニケーションペーパーを Moodle⁴⁾に掲載し、予め目を通して来るよう学生に伝えた。しかし、Moodle の実際の閲覧状況を見ると、1 回でも閲覧をしたことのある履修者は 48 名いたが、ほぼ毎週閲覧していたものはそのうちの数名であり、実際の予習効果は限られていたと考えられる。

②提出されたコミュニケーションペーパーへのコメント返却

コミュニケーションペーパーに「希望者には、次回、私のコメントを付けてコミュニケーションペーパーを返却します。「返却を希望する」旨を明記し

てください。」と付記した。実際に返却を希望する学生は 20~25 名程度であったが、希望者にはすべて手書きでコメントを記入して次回の授業時に返却した。コメントを記入する際には、できるだけ学生の励みになるように、良いところをほめ、課題となるところを示すとともに、学生にはない視点を提示するようにした。こうした取り組みは多少手間がかかるが、授業の双方向性を確保するとともに、一人ひとりの実情に応じた指導につながるものと考えられる。

返却を希望する学生の中には、積極的に質問を書いてくる者や、「自分でもっと調べてみたい」といった記述をしてくる者がいた。毎回コメントを返却することは、こうした学生の学習効果を深めるとともに、主体的な学びのきっかけにもなったと考えている。

学生のコミュニケーションペーパー「2」の記述とそれに対するコメントの一例を挙げると、以下のとおりである(→以下のものが筆者のコメント)。

「前のアルバイト先のパートの女性の家には認知症を患った高齢者がいたらしく、話を聞いていると本当に大変そうだったことが印象に残っています。認知症になってしまうと会話も難しくなり、本人がどうしたいのかを聞くことができないので、認知症予防に力を入れていくことは大切だと思いました。

→認知症=何もできないわけではありません。予防とともに、早期発見・早期対応によって症状を抑えることができることを理解してもらうことも大切でしょうね。もちろん、社会全体のサポート体制を広げていくことも必要になります。」

③レポートの提出

筆者は、2013 年 11 月 30 日に三重大学人文学部 30 周年記念企画の一つとして、講演「日本の社会保障～30 年前・30 年後を考える」を行った。これまでの社会保障制度の形成・発展過程と今後の社会保障の展望について理解が進むよう、履修者には、原則として聴講してもらい、講演概要と感想を A4 用紙 1~2 枚でまとめて提出させた。

聴講できない履修者には、自分で社会保障に関するテーマを自由に設定し、文献 1 冊以上を読み、自

分なりに調べることを条件に、A4 用紙 3～6 枚程度のレポートを提出させた。

3. 学生の反応から見た授業効果

(1) 最終回のコミュニケーションペーパーのコメントから見た効果

最終回の授業では、これまでの授業（30 回分）を振り返って、学んだこと、気づいたこと、感じたこと、考えたことを自由にコミュニケーションペーパーに記述してもらった。記名回答であるところや、学生の主観的な見方であるところは割り引いて考える必要があるが、良い効果が表れていることは伺える。以下、その中から一部を紹介する。

① 社会保障の意義等について理解し、考えさせられた

「社会保障と聞くと、私たちの生活には直接関係ないように感じていましたが、30 回の講義を通して、一つ一つの問題を見てきて、とても身近な問題であると気づきました。」

「これまでの授業を通して一番わかったことは、制度については深く知らないことが多かったということがわかったことです。今ある制度は今も将来も知識としてあったほうがいいけど、このような授業を聞かない限り、無縁なものとなっていたので、授業を受けてよかったです。」

「自分もそのサービスを受けていて、無関係なものではないので、もっと自分なりに考えてみたいと思いました。また、制度の目的や実際の取組みについて初めて知るものも多かったので、詳しく調べてみたいと思いました。」

「現在の日本は、社会保障、社会福祉において、様々な問題が正直こんなにもあったのかと驚きました。また、どれもすぐには解決できるものではなく、長期的目線で少しでも解決に近づけることが必要なのだと思います。」

社会保障の意義について理解するとともに、社会保障が抱えている課題について考えさせられたというコメントは多かった。

② 社会保障の在り方や課題について自分なりの受け止め方ができた

「しっかり働き、しっかりお金を稼いで、一部はきっちり税、保険料に回すといったことがいかに重要か、また人とのつながりや幅広に理解を持つていくことがいかに重要かを考えるいいきっかけになったと思います。」

「財源の確保－課題がたくさん出てくるということは、「お金が足りていない」状態だと思います。世の中が便利になるにつれ、介護や医療も“高度なもの”が求められるようになっていきます。収支のバランスが難しい（圧倒的に収く支）ということ、日本全体で共有する必要があると思います。」

「どの分野においても地域で支えていくための基盤が整っていないと気づいた。そのため第一に、地域の関心・認識・理解を確保し意識改革を行うとともに、支援していくための仕組みづくりが行われる必要がある。」

「制度などの様々な問題がたくさんあるけれど、やはり最終的には様々な「支え合い」が、誰もが安心して暮らすことができる社会を形成していくために最も必要だと思いました。」

このように、30 回の講義、グループディスカッションや発表という様々な経験を積む中で、社会保障の在り方や課題について自分なりの受け止め方ができたことは、授業の一つの効果であると考えられる。

③ 他人の多様な意見に触れて視野が広がった

「他人と国の施策や制度について話す機会はなかなかないので、福祉経済論の授業で社会保障全般について意見を交わすのはとてもよかったです。自分とは違う視点からの意見を聞き、新たな発見をするのは、とてもいい勉強になりました。」

「グループディスカッションにおいては、自分では全く思いつくことがなかった視点からの問題も聞くことができ、一つの焦点だけではなく、多方面からの意見を知ることで、視野が広がったと思います。」

「グループディスカッションすることで、自分の考えを自己完結で終わらせず、他の人の意見を聞くことで、自分にはない考え方をもらった人の意見が聞け

て気づくこともあったので、良い機会でした。」

「講義内容のほかに、自分以外の人がどんなことを思っているのか、どんな意見をもっているのか分かったのは、すごくメリットだったと思う。」

グループディスカッションや発表を通じて、他人の意見に触れることができる授業は、学生にとって新鮮に感じられたようである。

④全体発表の機会が勉強になった

「毎回、いつ発表に当たるかわからないので、緊張して聞いたり、発表準備するので、身につく勉強ができました。」

「毎回、様々な意見を取り込むことができ、また、発表するときには、グループの意見、自分の意見をまとめて発表して伝えるという良い経験にもなった。」

「自分の意見を相手に伝えることの、大勢の中発表することの難しさ。」

「福祉経済の面以外でも、自分と他の人の意見をまとめる難しさを知り、工夫するなど、少しは成長できたのではないかと思います。」

自分の意見にとどまらず、集団に目を向けながら意見を整理し、全体の場で発表する経験は、学生にとって貴重だったようである。

⑤自分の未熟さや自分を磨くために大切なことに気づけた

「周りの人と話やディスカッションをしていくうちに、自分がそこまで知識も特化した考え方もまとまった意見も持っていないことに気づかされ、普段の大学の講義を受けている中では気づかないようなことに気づくことができたのかなと思います。」

「これまでの授業を通して、まず知識を学び、それを元に自分の意見を考え、それを周りの人と交える、この流れがとても大切だと思いました。この中の何一つ欠けても意見や考えが磨かれていくことはないのだと思います。」

こうした気づきが学生の中から出てきたことは、一方的な講義ではない、双方向型、学生参加型の授業実践の成果と言えるのではないだろうか。

(2)授業アンケートから見た効果

2014年1月に受講生を対象に実施した授業アンケートでは、前年度に比べて全体的に高い評価が得られた⁵⁾⁶⁾。また、アンケートの中で、「コミュニケーションペーパーの記入を通じて、自分の考えをまとめる力が高まった」、「グループディスカッション・発表を通じて、自分の考えを伝える力が高まった」、「グループディスカッション・発表を通じて、多様な考え方を発見できた」、「今後もグループディスカッション形式の授業を続けてほしい」といった質問を独自に設けたところ、5点満点で4.29~4.53という比較的高い評価が得られた。授業アンケートの結果からは、グループディスカッションや発表の機会を通じて、社会から求められる能力の向上につながった学生が多いことが伺える⁷⁾。

このほか、「先生に続けてほしいと思うこと」（自由記述）として、「コメントを返却してくれること」、「新聞記事の掲載」といった回答があった一方、「自分が先生だったらしたいと思うこと」（自由記述）として、「授業内容と関連がありそうな文献を紹介してほしい」、「もう少しレポートが多くてもよかった」、「できるだけ上級生と下級生が混ざるようにしてほしい」といった回答が挙げられた。こうした点については、今後の検討課題と考えられる。

4. おわりに

社会科学系の大人教授業で双方向型、学生参加型の実践を行っている例はまだ少ない。しかし、大学に期待されるものが変わる中で、講義そのものの魅力を高めるとともに、双方向型の多様な教育方法を取り入れて授業の活性化を図ることは、学生の力を高める重要な要素になるものと考えられる。

筆者の授業実践においては、コミュニケーションペーパーのコメントや授業アンケートの結果から、大人教授業でのグループディスカッションと発表を通じて、学生が多様な考え方を発見すること、さらに、自分の意見をまとめ、それを他人に理解できるように伝えることに一定の効果があったことが認められた。一方、授業外学習の促進や、授業外学習を

契機にした発展的な議論など、学生の主体的な学びの観点からさらに検討すべき課題もあると考える。今後、こうした課題を踏まえ、必要な改善を続けていく中で、学生の能力向上につなげていきたい。

注

- 1) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(2012年4月)
- 2) 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」(2011年1月)
- 3) デンマークの「フレキシキュリティ」の仕組みを図示。
- 4) 三重大学公式の e-Learning システム・授業のためのグループウェア・コミュニティツール。
- 5) 「総合的に判断して、この授業に満足できた」の項目は、2012年度後期が5点満点で平均4.14に対し、2013年度後期は平均4.34に向上した。
- 6) 「この授業は「コミュニケーション力」を身につけるのに、役立ったと思う」の項目は、2012年度後期が4点満点で平均1.76に対し、2013年度後期は平均2.95に向上した。
- 7) 授業アンケートから新たな授業の試みに対する効果が伺われるほか、履修生（履修登録のみで1回も授業に出席していない者を除く）の授業出席回数も、2012年度後期の平均20.6回から2013年度後期には平均23.3回に増加した。